

『三国志集解』のつかいかた

佐藤ひろお

◆呉書九 魯肅伝

5 魯肅、字は子敬、臨淮の東城の人なり〔一〕。生まれて父を失ひ、祖母と與に居す。家は財に富み、性は施與を好む。爾時天下已に亂れ、肅家事を治めず、大いに財貨を散じ、擧きて（値をつけて）田地を賣り〔二〕、以て窮弊を賑はす。士と結ぶを務めと爲し、甚だ郷邑の歡心を得たり。

〔一〕 臨淮郡は、步騭伝に見ゆ。東城は、魏志 呂布伝 注引 先賢行状に見え、「陳登を東城太守と爲す」といふ。胡三省曰く、「東城、前漢は九江郡に属し、後漢は省く。当は是 袁術 復た置くべし」と。弼按ずるに、郡国志 下邳国に東城有り、即ち臨淮の東城なり。下邳本は臨淮なり。胡注誤りなり。↓步騭伝・呂布伝注

10 〔二〕 孟子 萬章下に、「標使者出諸大門之外」といふ。注に、「標は、麾なり」といふ。

15 周瑜 居巢長と爲り、數百人を將み、故に過り、肅を候ひ、并せて資糧を求む。肅の家 兩困の米有り〔一〕、各と三千斛なり。肅乃ち一困を指して周瑜に與ふ。瑜益と其の奇なるを知る。遂に相ひ親結し、僑・札の分を定む〔二〕。

〔一〕 詩 魏風 伐檀の章に、「胡取禾三百困兮」といふ。毛伝は、「圓き者を困と爲す」と云ふ。蓋し倉廩の圓き者なり。（方形のものは「京」という）

〔二〕 左伝 襄公二十九年に、「吳公子札聘於鄭、見子産、如舊相識、與之縞帶、子産獻紵衣焉」といふ。鄭大夫の国僑、字は子産なり。

20 袁術 其の名を聞き、就ち東城長に署す。肅術の綱紀無きを見て、與に事を立つるに足らざるとし、乃ち老弱を攜へ、輕俠の少年百餘人を將み、南のかた居巢に到り、瑜に就く。瑜の東渡するや、因りて與に同行し〔一〕、家を曲阿に留む〔二〕。

25 〔一〕 吳書に曰く、肅體貌は魁奇なり。少きより壯節有り、奇計を爲すを好む。天下將に亂れんとし、乃ち擊劍・騎射を學ぶ。少年を招聚し、其の衣食を給し、南山中に往來して射獵し〔二〕、陰かに相ひ部勒し、武を講じ兵を習ふ。父老 咸曰く、「魯氏世と衰へ、乃ち此の狂兒を生む」と。後に雄傑並び起ち、中州擾亂す。肅乃ち其の屬に命じて曰く、「中國綱を失ひ、寇賊横に暴れ、淮

30 ・泗の間 遺種の地に非ず。吾聞くに、江東は沃野萬里、民は富み兵は彊く、以て害を避く可し。寧んぞ相ひ隨へて俱に樂土に至るを肯んじ、以て時變を觀んや」と。其の屬皆命に従ふ。乃ち細弱をして前に在り、彊壯をして後に在らしめ、男女三百餘人もて行く。州追ひて、騎至る。肅ら徐行し、兵を勒して滿を持し、之に謂ひて曰く、「卿ら丈夫なり。當に大數を解すべし。今日天下は兵亂し、功有れども賞弗く、追はざれども罰無し。何爲れぞ相ひ偏るや」と。又自ら盾を植ゑ、弓を引きて之を射たり。矢皆洞貫す〔三〕。騎既に肅が言を嘉とし、且つ度制すること能はず、乃ち相ひ率ゐて還る。肅江を渡りて往きて策に見え、策も亦 雅だ之を奇とす〔四〕。

35

〔一〕 曲阿は孫策伝に見ゆ。

〔二〕 一統志に、「鳳陽県の西三里に西魯山有り。相ひ伝ふるに、魯肅の兵を屯せし処爲り」と。

〔三〕 貫は、穿なり、中なり。

〔四〕 李清植曰く、「本伝の後文、肅劉子揚の言を以て、往きて鄭宝に依らんと欲す。周瑜止まることを勧め、乃ち之を權に薦む。則ち先に自ら孫策に見ゆるの事有ることを得ず。策の英俊を收納するを以て、若し早く肅に見ゆれば、必ず棲遲せしめず。呉書の云う所、蓋し訛を伝ふるなり」と。

40 梁商鉅曰く、「肅伝曰く、『曲阿に還り、北行せんと欲す。會と瑜已に肅が母を徙して呉に到らしめ、肅具さに状を以て瑜に語る。時に孫策已に薨せり』と。是れ肅先に未だ江を渡らず、亦た未だ嘗て策に見えざるなり」と。↓周瑜伝

45 會と祖母亡し、還りて東城に葬る。劉子揚肅と友善し、肅に書を遺りて曰く〔一〕、「方今、天下に豪傑並び起ち、吾子の姿才、尤も今日に宜し。急ぎ還り、老母を迎へよ。事東城に滞る無かれ。近く鄭寶なる者、今巢湖に在り〔二〕、衆萬餘を擁す。處地は肥饒にして、廬江間の人多く依りて之に就く。況んや吾が徒をや。其の形勢を觀るに、又博く集む可し。時は失ふ可からず、足下之を速やかにせよ」と。肅其の計を然りと答ふ。葬畢はり、曲阿に還り、北行せんと欲す。瑜に會するに、已に肅が母を徙して、呉に到らしむ。肅具に状を以て瑜に語る。時に孫策已に薨するも、權尚ほ呉に住まる。瑜肅に謂ひて曰く、「昔、馬援光武に答へて云はく、當今の世、但だ君臣を擇ぶに非ず、臣も亦君を擇ぶなりと。今主人、賢に親しみ士を貴び、奇を納れ異を録す。且つ吾聞くに、先に祕論を哲り、運を承けて劉氏に代はる者は、必ず東南に興らんと。事勢を推歩するに、其の曆數に當たる。終に帝基を構へ、以て天符に協ふは、是れ烈士攀龍・附鳳馳騫の秋なり。吾方に此に達せり。足下、須らく子揚の言を以て意に介すべからず」と。肅其の言に従ふ。瑜因りて薦む、「肅が才宜しく時を佐くべし、當に廣く其の比ひを求め、以て功業を成すべし、去らしむ可からず」と。↓劉曄伝

50 〔一〕 通鑑考異曰く、「劉子揚肅を招きて往きて鄭宝に依らしめ、肅將に之に従はんとす。瑜權の輔く可きを以て、肅を止む。按ずるに、劉曄鄭宝を殺し、其の衆を以て劉勲に与ふ。勲策の滅ぼす所と爲る。宝安んぞ權の時に及ぶを得んや」と。梁商鉅曰く、「子揚、即ち劉曄の字なり。曄伝に拠るに、『曄鄭宝の爲に驅逼せられ、江表に赴かんと欲するに、曄謀りて之を殺す』と。是れ曄本より鄭宝の党与に非ず。豈に魯肅に宝に従ふの事を勧むること有らんや。宜しく温公の取らざる所と爲るべし」と。

55 〔二〕 巢湖は、魏志 明紀 青龍二年にあり。

60 〔三〕 李安溪曰く、「果たして何の驗なるや。且に此の心を存すは、則ち亦た曹操の心なり」と。

65

1/8

2/8

◆吳書七 步騭伝

步騭、字は子山、臨淮の淮陰の人なり〔一〕。

〔一〕漢書地理志、「臨淮郡の淮陰」といふ。郡国志、「徐州下邳国淮陰」といふ。劉昭注、「武帝臨淮郡を置き、永平十五（七二）年更めて下邳国と為す。淮陰下郷に南昌亭有り。韓信寄食せし処なり」といふ。……謝鍾英曰く、「吳志步騭・步夫人伝並びに臨淮の淮陰の人と云ふ。蓋し旧に仍りて之を言ふ」と。

◆魏書九 呂布伝 注引 先賢行状

太祖登を廣陵太守と爲し、陰かに衆を合せて以て呂布を圖らしむ。……（建安三年冬）布既に誅に伏し、登功を以て加へて伏波將軍を拜す。甚だ江・淮の間の歡心を得たり。是に於いて江南を吞滅するの志有り。（建安五年）孫策軍（孫權）を遣はし登を匡琦城に攻む。……賊（孫權）遂に大い破れ、皆船を棄てて逃走す。登勝ちに乗じて追奔し、斬虜すること萬を以て數ふ。……登を遷して東城太守と爲す〔一〕。……孫權遂に江外を跨有す。太祖毎に大江に臨みて歎じ、「早く陳元龍が計を用ひざるを恨む。而して豕を封じて其の爪牙を養はしむ」と。

〔一〕趙一清曰く、「漢書地理志に、九江郡の東城県あり。後漢は省く。故に統志に之無し。未だ郡を立つるを聞かず。此れ城の字は、郡の字の誤りなるを疑う。登広陵由東郡に遷る。既に去りて淮南遂に虚たり。曹公故に追ひて其の計（江南の吞滅）を用ひざるを恨むなり。若し仍りて九江に在らば、則ち何ぞ歎き恨むこと之有らんや」と。……謝鍾英曰く、「東城県を廢するに、班志九江郡に属せしめ、国志下邳に属せしむ。先賢行状、『陳登東城太守に遷る』といふ。吳志、

〔魯肅臨淮の東城の人』といふ。蓋し漢末升して郡と作し、三国時、地は兵衝に当たり、遂に廢せり」と。……弼按ずるに、「下文に『広陵の吏民郡を抜けて相ひ随ふ』の語有り。当に仍りて下邳の東城と為すべし。地望相ひ近く、故に能く相ひ随ふなり。若し兗州の東郡為れば、則ち距離甚だ遠し。何ぞ能く郡を抜けて相ひ随はんや。又本志方技伝華佗伝に『広陵太守の陳登病を得て死す』と云ふ。其れ『東城太守為り』と言はず」と。↓孫策伝

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

◆吳書一 孫策伝

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

時に袁術僭号し〔一〕、策書を以て責めて之と絶つ〔二〕。曹公策を表して討逆將軍と為し、封じて吳侯と為す〔三〕。後に術死す〔四〕。長史の楊弘・大將の張勳ら、其の衆を將ゐて策に就かんと欲す。廬江太守の劉勳要へ撃ち、悉く之を虜へ、其の珍寶を收めて以て歸る〔五〕。策之を聞き、偽りて勳と盟を好くす。勳新たに術の衆を得たり。時に豫章の上繚の宗民萬餘家江東に在り。策勳に之を攻めて取らんことを勸む。勳既に行き、策輕軍もて晨夜に襲ひ廬江を抜く〔六〕。勳が衆盡く降り、勳獨り麾下の數百人と與に、自ら曹公に歸す〔七〕。是の時、袁紹方に疆く〔八〕、而して策江夏を并す〔九〕。曹公、力は未だ能く逞しからず、且に之を撫せんと欲す。乃ち弟の女を以て、策の小弟の匡に配す。又、子の章の爲に、賁の女を取る〔一〇〕。皆禮もて策の弟の權・翊を辟す。又揚州刺史の嚴象に命じ、權を茂才に擧げしむ〔一一〕。

〔一〕術の僭号 建安二年に在り。

〔二〕何焯曰く、「策前に此れ猶ほ術の部曲為るがごとし。自ら術と絶ちて乃ち名を漢藩に正し、以て自立することを得たり。後に曹公亦た策の術と絶つことを以て、討逆の号を授く」と。

〔三〕胡三省曰く、「討逆將軍、亦た創めて置くなり。烏程侯由り封を吳に徙す。其の封を進むるなり」と。

〔四〕范書 献帝紀、「建安四年六月、袁術死す」といふ。

〔五〕袁術 孫策をして廬江太守の陸康を攻めしむ。策已に廬江を抜き、術復た故吏の劉勳を用て太守と為す。術死するや、勳之に背き、勳固より不義なり。術亦た人を知ること昧しと謂ふ可きなり。

〔六〕策廬江の劉勳を攻むるは、建安四年に在り。孫權伝に見ゆ。

〔七〕劉勳の事 魏志 武紀 建安四年に見ゆ。魏志 劉曄伝に、「劉勳の兵江・淮の間に強し。孫策之を惡む。使を遣はして辞を卑くし幣を厚くして勳に上繚を攻めよと説く。勳之を信じ、兵を興して上繚を伐つ。策果たして其の後ろを襲ひ、勳窮蹙し、遂に太祖に奔る」といふ。

〔八〕魏志 武紀に、「建安四年、是の時 袁紹既に公孫瓚を并せ、四州の地を兼はせ、衆は十餘萬、將に軍を進めて許を攻めんとす」といふ。

〔九〕策是の時亦た未だ江夏郡の全境を有たざるなり。

〔一〇〕彰、各本均しく章に作る。官本考証曰く、「章当に彰に作るべし、鄢陵侯なり」と。

〔一一〕潘眉曰く、「魏志 荀彧伝注にも亦た嚴象有り。御覽 卷百十八に引く吳志は衆に作る。衆は即ち衆字なり。蓋し宋本 嚴象に作り、今本或いは衆を訛りて象と為すのみ」と。沈家本曰く、「或伝注引 三輔決録は、『象、字文則』といふ。是れ其の名は当に象に作るべし、応に衆に作るべからず。鮑本 御覽は象に作る。未だ潘氏の拠る所 何なる本なるやを知らず」と。

建安五年、曹公 袁紹と相ひ官渡に拒ぎ、策陰かに許を襲ひ、漢帝を迎へんと欲す。密かに兵を治め、部して諸將を署す。未だ發せざるに、會と故吳郡太守の許貢の客の殺す所と為る。是より先、策貢を殺す。貢の小子客と與に、江邊に亡匿す。策單騎にて出で、卒かに客と遇ひ、客撃ちて策を傷つく

〔一〕〔一〕。

〔一〕江表傳に曰く、「廣陵太守の陳登射陽を治とす。登即ち瑀の從兄の子なり。策前に西征するや、登陰かに復た間使を遣はし、印綬を以て嚴白虎の餘黨に與へ、後害と爲さんと圖り、以て瑀の破らるるの辱に報めんとす。策歸り、復た登を討つ。軍丹徒に到り〔二〕、糧を運ぶを須待す。策性は獵を好み、步騎の數を將ゐて出づ。策驅馳して鹿を逐ふ。乗る所の馬は精駿なり。從騎絶えて及ぶ能はず。……」と。

〔二〕何焯曰く、「策本は袁氏の部曲なり。其の喪敗するを觀て、乃ち始めて睽貳す。漢に於いて則ち江外の大賊なり。貢既に忠臣にして、其の客も亦た高漸離（始皇帝の暗殺を試みた）に愧づること無し」と。康發祥曰く、「孫策の死は、父の堅に似るところ有り。蓋し策許貢の客の殺す所と為り、堅 黃祖の軍士の射る所と為るは、是れ輕躁なる者の鑑戒と為る可し」と。

〔三〕

〔四〕

〔五〕

〔二〕郡国志に、「吳郡 丹徒」あり。……通鑑考異曰く、「策伝の云ひに拠ると、『策 許を襲はんと謀るに、未だ発せずして死す』と。陳矯伝曰く、『登 孫権の為に匡奇に囲まれ、登 矯をして太祖に救ひを求めしむ。太祖 救ひに赴かしむ。吳軍 既に退き、登 伏を設けて追奔し、大いに之を破る』と。先賢行状、『登 江南を吞滅するの志を有す。孫策 軍を遣わして登を匡奇城に攻む。登 大いに之を破り、斬虜は萬を数ふ。賊 軍を喪ふことに忿り、尋いで復た大いに兵を興して登に向かふ。登 兵の敵せざるを以て、功曹の陳矯をして救ひを太祖に求めしむ』と云ふ。此の數者 参差して(互いに入り交じり) 同じからず。孫盛 異同評 云はく、「袁紹 建安五年を以て黎陽に至り、策 四月を以て害に遇ふ。而るに志は『策 曹公 紹と官渡に相ひ拒ぐと聞く』と云ふ、謬なり。登を伐つの言、証有りとなす。今之に従ふ」と。↓魯肅伝に戻る

145 ◆吳書九 周瑜伝

頃之、袁術 從弟の胤を遣はし、尚に代へて(丹陽) 太守となす。而して瑜 尚と俱に壽春に還る。術 瑜を以て將となさんと欲す。瑜 術の終に成す所無きを觀て、故に居巢長となさんと求め〔一〕、塗を假りて東歸せんと欲す。術 之を聽す。遂に居巢自り、吳に還る。是の歲、建安三年なり。策 親しく自ら瑜を迎へ、建威中郎將を授け、即ち兵二千人・騎五十匹を與ふ。瑜、時に年は二十四、吳中 皆呼びて周郎となす。↓年譜(建安二年まで)

〔一〕居巢は、魏志 武帝紀 建安二十二年に見ゆ。趙一清曰く、「居巢 後に魏に入る。『建安二十二年、操 居巢に軍し、尋いで引きて還る。夏侯惇を留めて二十六軍を督せしめ、居巢に屯す』といふ。是なり」と。弼 按ずるに、「魯肅 南のかた居巢に到り、周瑜に就く。即ち此なり」と。

155 ◆魏志十四 劉曄伝

劉曄、字は子揚、淮南の成惠の人なり。漢光武の子、阜陵王の延の後なり〔一〕。……汝南の許劭 人を知るといふ名あり、地を揚州に避け、曄 佐世の才有りと称す。揚士 多く輕俠にして狡桀なり。鄭寶・張多・許乾の屬有り〔二〕、各と部曲を擁す。寶 最も驍果たり、才力 人に過ぎ、一方に憚らる。百姓を驅略し、江表に越赴せんと欲す。曄の高族にして名人たるを以て〔三〕、曄に彊逼して此の謀を唱導せしめんと欲す。曄 時に年二十餘、心内に之を憂ひて未だ縁有らず。會と太祖 使を遣はして州に詣たしめ、案問する所有り。曄 往きて見え、爲に事勢を論じ、將に與に歸せんことを要め、駐止すること數日。寶 果たして數百人を從へ牛酒を齎して來りて使に候ふ。曄 家僮をして其の衆を坐中・門外に將おしめ、爲に酒飯を設け、寶と與に内に宴飲す。密かに健兒を勒し、因りて觴を行ひて寶を斫らしむ。寶、性は酒を甘しとせず、視候 甚だ明なり。觴する者 敢へて發せず。曄 因りて自ら引きて佩刀を取り、寶を斫殺す。其の首を斬りて以て其の軍に令し、云はく、「曹公より令有り、敢へて動く者有らば寶と同罪となす」と。衆 皆驚き怖れて走りて營に還る。營に督將・精兵數千有り。其の亂を爲すを懼れ、曄 即ち寶の馬に乗り、家僮の數人を將おて、寶の營門に詣り、其の渠帥を呼び、禍福を以て諭す。皆叩頭して門を開き曄を内る。曄 撫慰して安懷し、咸悉く悦服し、曄を推して主となす。曄 漢室の漸く微なるを觀て〔四〕、己 支屬爲れば、兵を擁することを欲せず。遂に其の部曲を委て廬江太守の劉勳に與ふ。勳 其の故を怪しむ。曄曰く、「寶 法制無く、其の衆 素より鈔略を以て利となす。僕 宿てより資無し。而して之を整齊せば、必ず怨を懷かしめ久しきこと難し。故に相ひ與ふるのみ」と。時に勳の兵江・淮の間に彊し。孫策 之を惡み、使を遣はして辭を卑くし幣を厚くし、書を以て勳に説ひて曰く、「上繚の宗民、數と下國を欺き、之に忿ること年有り。之を撃つに、路 便ならず。願はくは大國に因りて之を伐たん。上繚 甚だ實たり、之を得れば以て國を富とす可し。請ふ、兵を出して外援となさんと爲らんことを」と。勳 之を信じ、又策より珠寶・葛越を得て、喜悅す。外内に盡く賀し、而るに曄のみ獨り否とす。勳 其の故を問ふ。對へて曰く、上繚 小さきと雖も、城は堅く池は深く、攻め難く守り易し。旬日にして擧ぐ可からず。則ち兵は外に疲れ、而して國は内に虚たり。策 虚に乗じて我を襲はば、則ち後 獨り守る能はず。是れ將軍 進まば敵に屈し、退けども歸する所無し。若し軍 必ず出ださば、禍ひ今に至らん」と。勳 從はず、兵を興して上繚を伐つ。策 果して其の後を襲ふ。勳 窮蹙し、遂に太祖に奔る。↓年譜(建安三年以降)

〔一〕范書 光武十王伝、「阜陵質王の延、建武十五年 淮陽公に封ぜらる。十七年、爵を進めて王となす」といふ。

〔二〕曄 魯肅に書を与へて云はく、「鄭宝 巢湖に在り、衆萬餘を擁す」と。吳志 魯肅伝に見ゆ。

〔三〕胡三省曰く、「曄 漢の宗室に出で、蔣濟・胡質と俱に揚州の名士となす」と。

〔四〕何焯曰く、「此の時、曹氏 漢に代はるの勢 未だ成らず。支屬なるを以て兵を擁することを欲せざるとは、乃ち曄 後來 詞を飾るなり」と。

建安元年、呂布が張飛から下邳城を奪取し、徐州刺史を自号。

孫策が会稽太守の王朗を駆逐し、呉郡で厳白虎を平定。孫策が会稽太守に。

建安二年春、袁術が皇帝の位に即く。

夏、孫策が献帝の詔勅を受け、袁術の討伐を錢唐で準備。（呂布・陳瑀との共闘命令）

下邳の陳瑀が、厳白虎に印綬を与え、孫策から離反させる。孫策が再平定、陳瑀を撃破。

九月、袁術が陳国の王を暗殺するが、曹操に大敗。（袁術の将来性のなさが判明）

寿春にいた周瑜が居巢長となり、魯肅の家（臨淮の東城）を訪問。米倉を贈られる。

袁術が魯肅を東城長に任命。魯肅は拒否して、居巢の周瑜を頼る。

魯肅が徐州軍（刺史は呂布）に追われたが、退ける。

建安三年、周瑜が居巢から長江を東渡して、孫策に合流。魯肅が同行し、曲阿に家属を置く。

（魯肅伝 注引『呉書』は、孫策が魯肅を評価したするが、臣従の有無は不明）

ほどなく魯肅の祖母が死亡。老母を曲阿に残し、長江を西渡して東城に帰還。

淮南の劉子揚（劉曄）が、魯肅に、老母を回収して鄭宝を頼れと助言。

孫策が、献帝に建安元年の二倍の物資を献上して、討逆將軍・呉侯となる。

呂布が、袁術との婚姻・同盟を試みる。曹操は陳登（陳瑀の同族）を広陵太守に。

冬十二月、陳登が曹操とともに呂布を殺して、伏波將軍となり、江南の平定を計画。

建安四年、袁術・劉表 討伐の詔勅。夏六月、袁術が病死。

（袁術の死による揚州の空白を受けてか）、鄭宝が劉曄を盟主とし、勢力拡大を試みる。

督軍御史中丞の嚴象が、袁術の死を受けて揚州刺史に（魏志 荀彧伝 注引 三輔決録）。

劉曄が曹操の使者（嚴象か）と時勢を論じ、そこに訪れた鄭宝を殺害。

劉曄が鄭宝の残党を率い、廬江太守の劉勲（袁術の後継者の最有力候補）を頼る。

秋から冬、孫策は詔勅に従い、周瑜とともに劉表を討伐するため西征。

西征の途上、孫策が劉勲に上繚の討伐を勧誘。劉曄が制止するが、劉勲は出撃。

孫策が廬江を陥落。劉勲は曹操を頼る。十二月、孫策が黄祖を撃破。

孫策が不在の呉郡で、陳登が厳白虎の余党を手懐け、孫策から離反させる。再々平定戦。

建安五年、孫策が広陵太守の陳登（治所は射陽）を匡琦城で攻める。

夏四月、孫策が許貢の客により死亡。周瑜・張昭が、孫策を輔佐する体制に移行。

陳登が、孫策を退けた功績により、広陵太守から東城太守（魯肅の本貫地）に遷る。

魯肅が東渡して曲阿に行く。鄭宝は滅亡後なので、北行を試みる（曹操を頼るためか）

周瑜が魯肅の母を呉郡に移した後であり、周瑜の説得により、魯肅は孫策に臣従。

